

「男女共同参画社会」の実現を目指す

特集

未来館フェスティバル2019 シンボリイベント
山口 香さん講演会

「なりたい自分になる生き方～スポーツから学んだ大切なこと～」

- 未来館フェスティバル開催報告
- 図書室のオススメ本
- 当センター利用料金改定についてのお知らせ



未来館 NEWS

山口 香さん | 講演会

●柔道をはじめたきっかけ

私は東京オリンピックの年の生まれ、小学校1年生で柔道を始めましたが、当時、柔道ブームでした。『姿三四郎』を見て「これだ!」と思い、「柔道をやりたい」と母親に言いました。当時、女の子が柔道をやりたいといったら、心配するのではないかと思うのですが、わりと簡単に「やりたければいいよ」と言ってくれました。

ところが、道場の先生へ「柔道をやりたい」とお願いしたら、「女の子はいないから続かないよ」と断られてしまいました。でも、やめろと言われるとやりたくなるし、ましてや「男の子じゃないから」と言われてちょっとカチンときました。それで何度もお願いしてようやく通えるようになりました。そのとき、先生は「女の子だから特別扱いしない。男の子と同じように教えるよ」と言ったのです。望むところです。そうしてやってみたら、私は結構強くて、やめていくのは私ではなく、私に負けた男の子たちでした。

このように1970年ごろは、「女性はこうあるべき」という固定観念が非常に強かった時代でした。運よく私は周りの理解があって、私の夢を一步前に進めることができました。

●女性のスポーツの歴史

今でこそ女性でも男性と同じように、どんなスポーツもできるようになりましたが、最初からそうだったわけではありません。初めてのオリンピックは今から100年以上前、1896年にギリシャのアテネで行われました。この記念すべき第1回大会は女性の参加が禁止されました。なぜかというと、近代オリンピックの父といわれるフランス人のクーベルタン男爵は「女性の役割は男性の勝者に冠をささげることだ」という考え方があり、女性の汗でオリンピックを汚してはならないというような時代だったためです。当時もオリンピックに出たい女性はたくさんいたと思いますが、まだ時代が追いついていませんでした。

でも皆さん、「女性の役割は男性の勝者に冠をささげること」って今も変わっていないと思いませんか。メダルセレモニーのときにメダルを持ってくる人は、全員女性ですよね。私はこれを東京オリンピックでなんとか変えたいと思っています。なぜ女性じゃなければいけないのか、男性でもいいではないですか。1896年から100年以上の時を経てもそのこと自体が変わっていない。女性はそういう役割だとすり込まれているのですね。

当時の新聞に「女子のスポーツが発達すると、女子らしさが失われ品位を下げるのではないか」という記事が載っています。今では医学や科学が進歩して、女性だって体力をつけて、健康であることが重要だということが当たり前になって



います。でも当時は、女性が運動をしそうると子宮が硬くなったり子どもが産めなくなるなど、およそ医学的に根拠がないようなことが言われていて、女性がスポーツをすることが妨げられていたのです。

日本の女性で初めてメダルを取ったのが、1928年第9回アムステルダム大会に出場した人見絹枝さんです。800mで銀メダルを取りました。人見さんはもともと100mや200mなどの短距離の選手ですが、100mと200mは残念ながら決勝にすら残れませんでした。人見さんは、このままでは日本に帰れない、もう女性は出場させないほうがいいと言われたら大変だと、急遽、800mにエントリーし、見事に銀メダルを獲得しました。

この第9回大会では、初めて女性の陸上競技への参加が認められました。ところが、800mの最後のゴールで、選手が力尽きてへなへなと座り込んでしまう様子を見たIOC・国際

オリンピック委員会の役員たちが、「こんな倒れこむような種目は女には無理だ」といって、それからこの800mという種目は1960年代までなくなってしまいました。その頃の社会では、女性はかよわきもの、守るべきものだから、無理をさせてはだめだという思いがあったのです。

女性のスポーツの歴史というのは、女性に対しての偏見というより、医学や科学が未発達だったために、女性は体力がないと決めつけられていたところが多分にあったと思います。スポーツに挑戦したいという女性はたくさんいたでしょうが、やりたければできた時代ではありませんでした。

このようなことは大昔の話ではなく、女性のスポーツがどんどん盛んになってきたのは最近のことです。今でも女性アスリートへの偏見や、環境が十分でないことがあります。最近は「ママさんアスリート」が増えています。お子さんがいて、日本のトップで頑張っている人を「ママさんアスリート」と言う

なりたい自分になる生き方
～スポーツから学んだ大切なこと～

のなら「パパさんアスリート」とも言ってほしいです。アスリートとしての部分をちゃんと評価してもらいたいと思います。

ロンドンオリンピック女子柔道で金メダルを取った松本薫さん、「野獣」といわれた方ですが、彼女のことを「野獣も畠を下りると普通の女性」です。いやいや、畠に上がっていても普通の女性です。ただ、強いだけです。男性も強い部分と優しい部分がある、女性だって同じです。強くあるべきところには強くあらなければならないし、優しくあるべきところでは優しくする。女性だから常に優しくというわけではありません。

また、環境面でもそうです。サッカーのワールドカップは人気がありますが、女性のサッカーはどうでしょうか。東日本震災があった2011年、「なでしこ」がワールドカップで優勝しました。あのときほどスポーツの力というのを感じたことはありません。そのときに男性のサッカーはとても優遇されているけれども、女性のサッカーは恵まれていないことがわかりました。しかし、そのころから、女性のスポーツへの関心が高まり、やりたいと思っている人が頑張れるような環境をつくっていくことが理解されるようになってきました。

スポーツは社会の縮図です。女性がスポーツで力を発揮できないような環境があるということは、社会も同じということです。スポーツは社会を映す鏡ともいわれます。そういう意味では、女性であっても、障がい者であっても高齢者であっても、やりたいと思うことに挑戦できる社会であることが必要です。挑戦の機会を得られる社会をつくり、それをスポーツでも実現していきたいというのが私の願いです。

2012年のロンドンオリンピックは画期的な大会でした。ロンドン大会では26競技が採用されましたが、初めてすべての競技に女性の種目が採用されました。いちばん最後に入ったのはボクシングです。また、参加した204の国と地域すべてに女性の参加者がおりました。宗教等の関係でなかなかスポーツができるないとか、ユニフォームなどの制約がある中で、すべての国の人たちがこのオリンピックに参加しました。國際オリンピック委員会は非常に大きな仕事をしたと思います。

直近、2016年のリオデジャネイロオリンピックでは、日本選手団は男性の選手174人、女性の選手164人とほぼ半々です。ロンドン大会では女性のほうが多く、女性選手が多いオリンピックも何回かあり、選手の割合はほぼ一緒になってきました。

大坂なおみ選手が活躍しているテニスでは、全米オープン、全豪、全仏、全英の温ブルドンという四大大会がありますが、それらの大会は優勝者の賞金が男女同一です。一方で、ゴルフは男女の賞金格差があって、大きい大会だと1億円ほど違います。

なぜテニスは男女で賞金が同額なのでしょうか。『エースをねらえ!』にも出てくる伝説のビリー・ジーン・キングというテニス選手が、賞金の男女平等について「男性も女性も同じように頑張っているので賞金も同額にしてほしい」と一生懸命訴え、またその他の多くの選手が発言したからです。

ここが大事で、女性と男性でスポーツの環境が違いますから、女性が置かれている環境を良くしたいと思ったら、「もっとこうしてください」ということを言わなければいけません。言い続けていれば、気が付いてくれる男性も増えていきます。

セリーナ・ウィリアムズ選手は、昨年出産してツアーに戻つてきました。彼女は、子どもを産むことに伴う産休や育休は社会一般で認められている女性の権利なので、出産で試合に出られない期間があつてもランキングをそのまま残してほしいと訴え、認められました。ゴルフは賞金には差はありますが、育児休暇から復帰した選手のランキングは担保されています。

その他のスポーツでも、出産して復帰する場合、1年間は権利を保持するとすれば、もっともっと子どもを産んで復帰する選手が増えていくのではないかと思います。これはスポーツにとってもいいことで、子どもを産んで一時的に休んでも、技術を持った人が帰ってきてくれたほうがいいです。選手の活躍が長続きするということすごく重要です。このような環境を整えていくことを私たちはやらなければいけないと思います。

女子柔道がオリンピックの種目に入ったのは1988年のソウル大会からです。女子マラソンは、有森裕子さん、高橋尚子さん、野口みずきさんと、多くのメダルを取っていますから、ずいぶん昔からやっていたようですが、始まったのは1984年ロス大会です。女子サッカーは1996年のアトランタから、女子レスリングは2004年アテネからです。このように女性スポーツ、特にオリンピックへの道が開かれてきたのはここ三十年あまりです。女性が頑張り続けてきたからこそ、今の選手たちの活躍があるのです。

冬季大会では、いちばん最後に種目に入ったのがジャンプです。とても高いところから降りてくるので危ないと思われていたのか、女子のジャンプはなかなか採用されませんでした。2014年、ソチ大会で彗星のごとく現れたのが高梨沙羅選手ですが、メダルを取ることはできませんでした。次の平昌大会で高梨選手がメダルを取り、ライバルである伊藤有希選手が高梨選手に抱きつきました。なぜそういう行動に出たのかというと、高梨選手のメダルは、スキージャンプの女子みんなで取ったメダルなんだと。今まで先輩たちがオリンピックに出たいと頑張ってきて、ようやく道が開かれて初めて取つ

た。頑張ってくれてありがとう。これが次の世代にもつながっていくよね。その気持ちが表れた抱擁だったのです。

●スポーツは自己表現

私は、スポーツとは自己表現だと思っています。柔道で言えば、じっと待つのではなく、自分から技を仕掛けないと絶対に相手は倒れない。それが自己表現です。まずはやってみるという考え方方が生き方にもつながっていくと思います。

また、人間として強くなること、自立することが大切です。2013年に柔道の男性コーチが女性選手に暴力を振るつたことがありました。その時、私は殴られていたという選手たちに、なぜ暴力は嫌だと言えなかったのか、「私たちは金メダルを狙う選手です。殴つたり蹴られたりしなくとも、自分でやれます」と言えなかったのか、そこが残念だと思いました。つまり、柔道場では強くても道場をおりたら、自分の思っていることを相手に伝えられないような人間ではだめだということです。柔道で強くなつたということは、畠をおりても人として強くあらねばならないというふうに私は思っていますし、だからこそ、女性のスポーツをもっともっと発展させたいと思っています。

オリンピックに出場する選手は男女がほぼ半々ですが、女性コーチの割合は約2割です。JOCの加盟競技団体の女性役員の割合も、私が「もっと女性を増やそう」と言い続けた結果、15%まで増えました。これだけ女性選手がいるのだから、何かを決めるところに女性の意見が反映されるようにならないとだめです。

女性たちは自分の思うような競技でチャレンジできるようになりましたが、女性スポーツは次の段階を目指さねばなりません。能力があれば選手は活躍できますが、指導者や役員というのは誰かに選ばれないとできません。そこにバイアスがあって、男性に比べて女性が選ばれにくい環境があります。スポーツ全体が発展するためにも、女性の登用が必要であることを共有し、女性の活躍を促していくたいと思っています。

●「カルチャー」と「マインドセット」

これからスポーツを変えていくキーワードは「カルチャー(文化)」と「マインドセット(意識)」です。日本にはこれまでの歴史や文化・伝統がありますので、すぐはなかなか変わることができません。少しづつは変わってきていますが、今までそうあるべきだと思っていたものを見直し、さらに変えていきたいと思っています。

そして、変化というのは人を不安にします。ですからスポーツはなかなか暴力がなくならないのです。これだけだめ



だと言われているのになぜなくならないのか、それは、自分が育ってきた時代、信じていたものを否定できないからです。今の自分がるのは、指導者や先輩の厳しい指導のおかげだと思っているのに、突然、「時代が変わりましたから変えてください」と言われてもなかなか変えられません。スポーツだけではなく、これからの未来を生きる人たちを育てる社会をつくるためには、今まで男性が、女性が、と思い込んでいたものを一度リセットして、「男性と女性で変わりないよね。一緒にやっていこう」と、そろそろ私たちの意識を変えていかなければなりません。

私は、大学の恩師に「あなたの生き方が後に続く女性の道になる」と言われ、選手が終わったあと指導者になろうと決めました。当時は女性の指導者は少なかったので、私が指導者になることで、選手たちが、女性も指導者になれる、役員にもなれると思えるように、そういう思いでやってきました。しかし、「女性に頼んでも断られる」と言わになってしまうことがあります。ですから、「絶対に断るな。あなたがそれを引き受ければ、そのあとに次の女性が続く。あなたが断れば、やっぱり女はだめだということになる」と言っています。

そのほかにも、大事にしていることは、「頼まれたら可能性がゼロでない限りノーと言わない」ということです。人間というのは、得意なことだったら引き受けますが、苦手なことは避ける傾向にあります。だからうまくならないし、成長しないのです。得意ではないことに挑戦することが自分を成長させるのです。

また、自分の意見や考え方を持ち、発言を躊躇しないこと。そして、常に背筋を伸ばすこと。姿勢良く立ち、人の後ろに隠れないことです。隠れるというのは責任を取りたくないということです。スポーツというのはまさにそれで、柔道では投げられても誰のせいにもできません。すべて私の責任です。そういう気概を持つということが大事です。そして、柔道の嘉納治五郎先生が言われたのは、柔道で最も強い姿勢というのは自然体であると。これは生き方にも通じます。常に自分の気持ちのままに、ナチュラルな生き方、立ち位置こそが、どんなことにでも柔軟に対応できる、そんなふうに思っています。

●違いを尊重し、みんなが輝く社会へ

なぜ「男女平等」ではなく「男女共同参画」なのでしょうか。男女にはいろんな違いがありますから、「平等」ではなく「共同」なのではないかと私は思います。遠い未来、男女は平等になる日が来るかもしれません、それは、男性が子どもを産めるようになりますが、女性はできません。つまり生理的に決定的な違いがあり、様々な面で違いがあり、等しく同じではないと思っています。

大事なのは「違うからいい」ということです。男性と女性が一緒に面白くないし、違うから出会いがあり、別れがあり、仲間になったりする。これは個人個人もそうで、女性同士でも個々で違います。「あなたはそう考えるの? いろんな人がいるね」と、それが面白いわけです。社会はいろいろ人がいろいろな考え方があるのでうまく回っていくのです。違いというのはマイナスではなくプラスです。面倒くさいこともありますが、それを乗り越えて、説明したり理解せたりするコミュニケーションが社会をつくっていくと私は考えています。

スポーツはチームワークといいますね。柔道は個人戦ですが、7日間戦うためには同じチームとして戦い切らなければオリンピックのメダルは取れません。チームワークとは何かというと、違うバックグラウンドを持った人が、さまざま意見を出し合って同じ目標に向かっていくことで、同じ考えの人がいるということではありません。

一人一人が力をつけて、個人の能力がさまざまな場面で発揮される、それを見せてくれるのがスポーツであり、オリンピック・パラリンピックです。世界中の人たちが金メダルを目指すからこそ人間の能力は上がってきたのです。一人でやっていたら伸びず、ライバルがいるからこそ伸びるので。それこそがチームワークであり、みんなで進んでいくということです。

そして、違いを尊重して、お互いが相手に対する心遣いを持つことが大事です。人と比べずに、自分は価値があると考えましょう。女性も男性も、障がい者も高齢者も、みんな価値ある人間で力があり、輝ける場所は必ずあります。もっと言えば、輝く責任があるのです。一人が頑張ることが社会を良くします。そして、自分が楽しむこと。するとみんなが笑顔になれる社会になっていくと私は信じています。

来年の2020年、東京オリンピック・パラリンピックがいよいよやってまいります。大事なことは、元気でその日を迎えていただくことです。今日から、ストレスフリーでみんなが笑顔でいれば、きっと来年のいいオリンピック・パラリンピックに続くと思っております。

山口 香さん | 講演会

質疑応答

質問者

今日は本当に貴重な話をありがとうございました。元気をいっぱいもらいました。ここまで道を歩んでこられて、いろいろ悩みなどあったと思いますが、そういう悩みを乗り越えるための座右の銘がおありでしたら教えてください。

山口さん

ありがとうございます。私の座右の銘は2つあります、選手の頃は「継続は力なり」という言葉が好きでした。言い続けること、やり続けることが大切です。「遅々として進まない」という言葉がありますが、やっていれば必ず歩進していきます。ですから諦めずに続けていくという意味での「継続は力なり」ということです。

そしてもう一つは、「意志あれば道あり」です。最近、特に、若い人たちに話していますが、自分はこうなりたいとかこうあるべきだという夢とか目標とか、そういう気持ちを持っていれば必ず道は開けるということです。「継続は力なり」「意志あれば道あり」この2つを座右の銘としています。

参加者の声

参加者

10代

非常に楽しかったです。これから的人生で“なりたい自分”を改めて考えることができました。ありがとうございます。

参加者

10代

この講演会を聞いて、私はとても自分のためになったと感じました。今まで知らなかったスポーツの話、男女の違いの話など、これからの自分の生き方を考え、そしてよくすることができるとてもためになる講話となりました。

参加者

40代

改めて「個人の違い」というものを、評価の対象や自分と同じようにしようとする考えではなく、個性、多様性として尊重しなければいけないことに気づかされました。

参加者

60代

大変勇気をもらいました。自己主張しながらも全体のことをよく考えて、耳に心にとても入りやすい講話でした。

参加者

70代

自己表現、人間が強くなることをスポーツから学んだとのこと、私もこれから的人生、苦手なことにも頑張ろうと思いました。



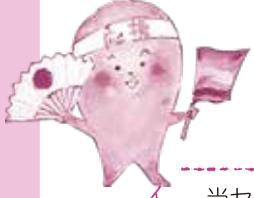
プロフィール：山口 香さん

ソウルオリンピック女子柔道銅メダリスト。筑波大学体育系教授。
1964年生まれ、小学1年生から柔道を始め、1978年～87年全日本女子体重別選手権10連覇。1984年世界選手権金メダル。1988年ソウルオリンピック銀メダル。翌年に現役を引退。現在は、筑波大学で教鞭をとる傍ら、JOC理事などとしてスポーツ全般の普及発展に努めている。

事業レポート

未来館フェスティバル2019

～誰にでも輝ける場所がきっとある 自分色のメダルをめざして～



開催報告

当センターでは、9月7日(土)、8日(日)の2日間、「未来館フェスティバル2019」を開催しました。ソウルオリンピック銅メダリストでJOC理事の山口香さんの講演会、50団体が出展した県民参加企画による展示、ステージ発表、ものづくり体験、ネットワークカフェ、認知症介護セミナーと様々なイベントが行われました。

今年は昨年を上回る約6,258人の方にご来場いただき、賑やかなフェスティバルとなりました。

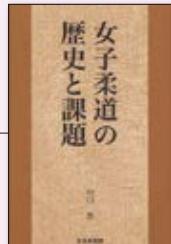


センター図書室の オススメ本

『女子柔道の歴史と課題』

【分類 6201/ヤ】
山口香/著 日本武道館 2012年

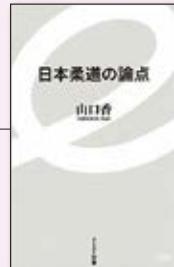
世界トップレベルの日本女子柔道。草創期から競技化そして現在までの女子柔道の歴史を、元メダリストである著者の体験を踏まえて紐解きます。女性の視点から、女子が抱える心身の問題、女子を指導する際の注意点、将来のキャリア形成などについて論じます。



『日本柔道の論点』

【分類 6201/ヤ】
山口香/著 イーストプレス 2013年

史上初の男子金メダルゼロで終わったロンドン五輪。女子もたった一個という結果に、なぜ日本柔道は弱くなったかが問われ、全柔連の在り方に疑問の声があがつた。日本柔道と世界柔道の抱える考え方の違いや、これから柔道の未来について語られています。



センター図書室展示「おすすめ本総選挙」結果発表!!

「おすすめ本総選挙」は、職員や利用者の皆さんから、おすすめの本とお気に入りの一文を募集し、「面白そう!」「読んでみたい!」と思う本に投票していただく企画です。未来館フェスティバルから1カ月の投票期間が終わり、総投票数64票による投票結果を発表いたします。



『マリコ、うまくいくよ』

【2202/ヤ】益田ミリ/著 新潮社(p195)

お気に入りの
一文

〈グランプリ〉…18票

「細～く開いた窓から 微風くらいは
吹きつづけていて 空気は変わる と、思いたいねえ」

詳しくはホームページをご覧ください。投票いただきました皆さん、本当にありがとうございました。

【問い合わせ】 福島県男女共生センター図書室 電話:0243-23-8308
開館時間 9時~20時(休館日は17時)

当センター利用料金の改定についてのお知らせ

この度、消費税増税に伴い、利用料金の一部を10月1日より改定いたしましたので、お知らせします。詳細につきましては、下記の通りです。ご理解賜りますようお願い申し上げます。

当センターを是非ご利用ください。

● 研修ホール（1F+2F）

改定前 改定後(令和元年10月1日~)

男女共同参画推進活動	7,200円	→	7,300円
その他の利用	14,400円	→	14,600円
付属設備 ビデオプロジェクター	3,100円	→	3,200円



● 宿泊室

利用人数 改定前 改定後(令和元年10月1日~)

男女共同参画推進活動利用 和室・洋室(ツインルーム)	1人で利用	3,000円	→	3,100円
	2人以上で利用	2,600円	→	2,700円
その他の利用の場合 和室・洋室(ツインルーム)	1人で利用	4,300円	→	4,400円
	2人以上で利用	3,900円	→	4,000円

